

高等学校における学力把握調査の活用についての研究

～基礎学力定着のために重要な指導事項、学力向上につながる要素の研究～

高知県立四万十高等学校 教諭 下元 亨
高知県教育センター 指導主事 別府 信一

本研究の目的は、高知県内の公立高等学校での学力定着把握検査結果を分析し、学力向上につながる要素を見いだすことである。検査として、ベネッセコーポレーションの検査に加えて、高知県学力定着把握検査アンケートを実施している。国語、数学、英語の検査結果は、学習到達ゾーンという指標で表される。第1回の検査の結果、学習到達ゾーンの最低レベルである D3 に該当する生徒は全体の4分の1以上を占めており、D3 の生徒の学力向上が喫緊の課題となっている。

研究は、検査結果を基に、クロス集計や相関分析、共分散構造分析、多母集団同時分析を行った。その結果、家庭学習の習慣付けが最も大切な時期は1年生であることや携帯電話の長時間の使用が学習の弊害となっていることが明らかとなった。また、共分散構造分析により、学力向上図を作成する中で、自己管理能力や感謝の心・貢献意欲が学力向上の重要な要素であることが分かった。さらに、学力向上図を基にした多母集団同時分析により、教員の熱意や学校生活の充実が、学力向上を効果的に促進する要素であることも分かった。

<キーワード> 学力向上図、GTZ、共分散構造分析、多母集団同時分析

1 研究目的

平成24年度から学力向上サポート事業（高知県教育委員会事務局高等学校課（以下、「高等学校課」という。））として、高知県の県立高等学校全日制及び昼間部36校で、学力定着把握検査（以下、「検査」という。）（第1回：3月・4月、第2回：8月・9月）を実施している。各高等学校においては、検査結果を基に、学力向上への様々な取組が進められている。また、年間2回（7月、2月）実施される学力向上サポート事業研究協議会では、県内36校の担当者が集まり、学力向上への取組の実践発表や情報交換が行われている。

検査は、ベネッセコーポレーション（以下、「ベネッセ」という。）のスタディーサポート（6校）と基礎力診断テスト（30校）を利用している。また、高等学校課と高知県教育センターとが作成した高知県学力定着把握検査アンケート（以下、「アンケート」という。）も実施している。

検査開始以来、特に課題となっているのが、ベネッセの定める学力指標である学習到達ゾーン（以下、「GTZ」という。）の最低ランク D3 に該当する生徒の割合が、全体の4分の1前後を占めていることである（図1）。また、高等学校入学後に家庭学習をしない生徒の割合が一層増加する傾向があること、進級時に GTZ が下降することも課題となっている。

これらを踏まえ、県内の高校生の意識と基礎学力の状況を調査分析し、課題の焦点化を図って学力向上への糸口を探ることが、現在求められている。本研究では、検査結果を基に、高知県全体の特徴を把握・分析してその課題を明らかにするとともに、学力向上につながる要素を見いだすことを目的とした。

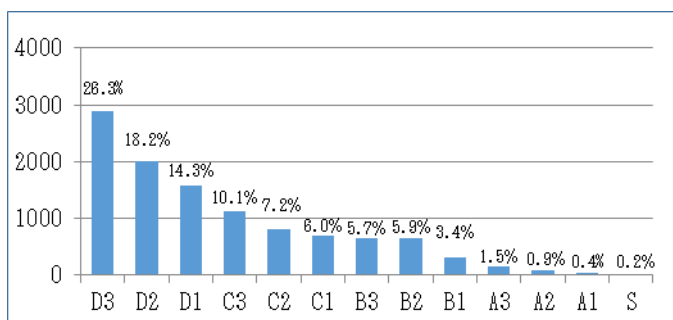


図1 各GTZにおける人数分布
(全学年 10993名 平成26年度第1回)

2 研究仮説

学力定着把握検査結果を分析することで、基礎学力定着のために重要な要素を見いだすことができる。

本研究では、この仮説を検証するために、以下のことを行う。

- ・検査結果の分析
- ・GTZが上昇している高等学校の取組の調査

3 研究方法

(1) 検査結果の分析

本研究では、主に平成26年度第1回の検査結果（受験者10993名、有効回答者数9801名）を用いて分析している。

ア 使用したデータ

(ア) GTZ

検査は、国語、数学、英語の3教科で行われており、その結果は、スタディーサポート、基礎力診断テストともに、GTZで評価される。

GTZは、D3を最低レベル、S1を最高レベル（基礎力診断テストは、A2が最高レベル）とする各レベルで表される（表1）。この中で、特にD3に該当する生徒については、義務教育段階の学習内容が十分身につけておらず、履歴書等も自分の力で書くことができないと言われている。D2以上が高等学校卒業後に最低限必要な学力レベルとされている。また、CゾーンまでGTZが上昇すれば、進路の可能性が大きくひらけると言われている。ベネッセが正答率を分析する際には、全国のCゾーンの平均値と比べるなど、Cゾーンは高校生の学力水準の標準として扱われている。

表1 GTZと進路選択肢の目安（ベネッセ）

学習到達ゾーン (GTZ)				進路選択肢	
				進学	就職
Sゾーン (S1~S3)		基礎力診断テスト (A2まで)		難関大合格レベル (最難関大はS1)	上場企業などの大手の 就職筆記試験や 公務員試験に 対応できるレベル
Aゾーン (A1~A3)				国立大合格レベル	
Bゾーン	B1	スタディーサポート		公立大合格レベル (一般入試)	
	B2			国公立大の推薦入試に合格 可能で、私立大の一般入試 では、選択肢の広がるレベル	
	B3				
Cゾーン	C1	基礎力診断テスト (A2まで)		私大・短大・専門学校の 一般入試に対応可能なレベル	就職筆記試験における 平均的評価レベル
	C2				
	C3				
Dゾーン	D1	基礎力診断テスト (A2まで)		上級学校に進学することは できるが、授業についていけず、 苦勞する学生が多い	就職試験に必要な最低限のライン はクリアしているが、仕事をする 上で支障が出ることが多い
	D2				
	D3				筆記試験が課される企業では 不合格になることが多い

※ D3に該当する生徒は義務教育範囲に未定着範囲が見られる

(イ) アンケート

高等学校課と高知県教育センターとが作成したアンケートで、質問は、30項目ある。

※ アンケートについては、資料1参照

(ウ) 学習力チェック

基礎力診断テスト内で実施されるアンケートである。本研究では、学習時間（授業を除く）と就寝時刻の項目への回答結果を利用した。

※ 本研究では、学習時間（授業を除く）を家庭学習時間とする

イ 分析内容

GTZ 及びアンケート回答を表 2、表 3 のように数値化し、以下の分析をした。

- ・GTZ とアンケート結果との関係から見いだされる特徴的な傾向
- ・GTZ とアンケート結果との共分散構造分析による学力向上図の開発とそれを活用した分析

表 2 GTZ の数値化

GTZ	D3	D2	D1	C3	C2	C1	B3	B2	B1	A3	A2	A1	S
数値	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13

表 3 アンケートにおける各選択肢の数値化

選択肢	あてはまらない	どちらかといえばあてはまらない	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまる	あてはまる
数値	1	2	3	4	5

※ 問 1 から問 4 を除く。問 2 については、選択肢の①、②、③、④、⑤を 5、4、3、2、1 とした。

問 3、問 4 についてはアンケート選択肢の数量をそのまま数値とした。

(2) GTZ が上昇している高等学校の取組の調査

平成 25 年度以降の基礎力診断テストの結果、入学後に GTZ の平均値が上昇している高等学校を抽出した。その高等学校での聞き取り調査から、取組状況を確認した。

4 結果と考察

(1) 検査結果分析

ア 検査結果のクロス集計から見える傾向

GTZ とアンケート結果との関係を調べたところ、次の(ア)から(エ)について、特徴的な傾向が見られた。

(ア) GTZ 別の生徒の傾向

D3 の生徒の特徴をつかむために、GTZ と各アンケート項目の回答をクロス集計し、アンケート項目に肯定的に回答している生徒（「①あてはまる」又は「②どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒）の割合を調べた。

その結果、GTZ が下がるにつれて、アンケート項目で問うている自尊感情や基礎的・汎用的能力などが低くなる傾向があり、また、D3 の生徒は、ほとんど全ての項目で、肯定的に回答している割合が最も少なかった（図 2）。

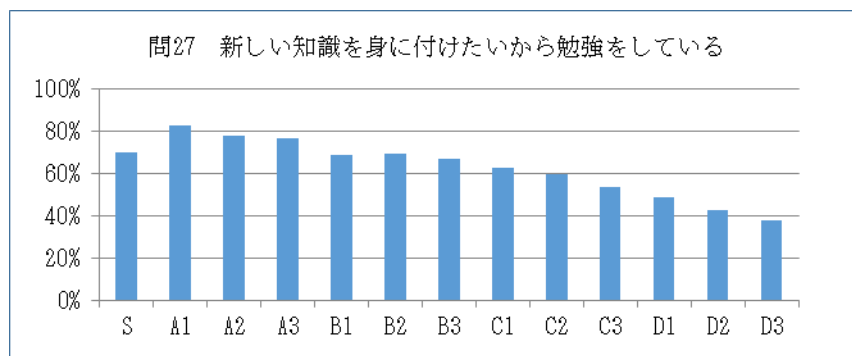


図 2 アンケート項目に肯定的に回答した生徒の割合 (GTZ 別) の典型例

(イ) 家庭学習の推移

GTZと最も強い相関を示したアンケート領域は、「家庭学習」であった。そこで、家庭学習について、学習力チェックでの平均学習時間（授業を除く）を問う項目への回答を集計すると、1年次から2年次にかけて、家庭学習をほとんどしない生徒の割合は増加しており（図3）、平均学習時間は減少している（図4）ことが分かった。2年次以降には、家庭学習をしない生徒の割合、家庭学習時間に変化が見られず、1年次での家庭学習習慣が、その後も継続されていることから、1年次での初期指導の大切さが分かる。

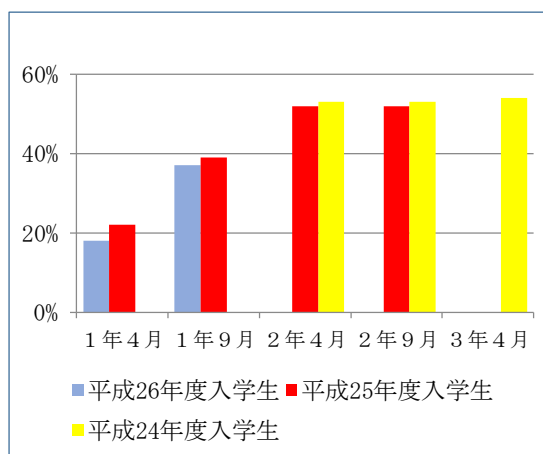


図3 「家庭学習をほとんどしない」生徒の割合の推移

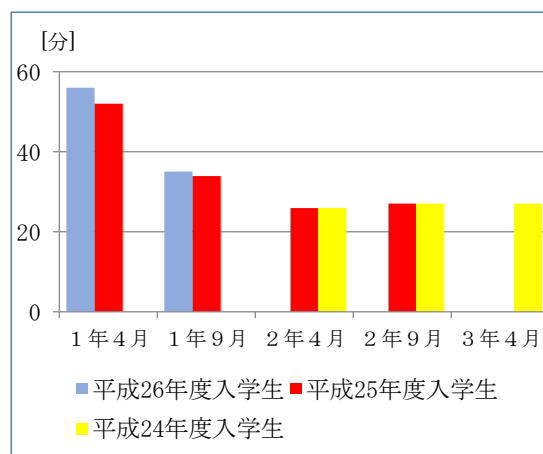


図4 平均家庭学習時間の推移

(ウ) 携帯電話等の使用時間

携帯電話と学力との関係について、平成26年度全国学力・学習状況調査では、小学校、中学校ともに、「携帯電話やスマートフォンで通話やメール、インターネットをする時間が短い生徒の方が、全ての教科で平均正答率が高い傾向が見られる」と報告されている。また、NHK放送文化研究所（2013）では、ネット（携帯電話等）の利用時間が長くなるほど、学校外でほとんど勉強しない生徒の割合が多くなること、さらに、ネット利用時間が長くなるほど就寝時刻が遅くなる生徒の割合が多くなることが示されている。

基礎力診断テストの学習力チェックでの、平均学習時間（授業を除く）を問う項目とアンケート問4「あなたは、携帯電話やスマートフォンなどの情報端末を、1日にどの程度利用していますか」の結果とをクロス集計した。

その結果、問4に「3時間以上」と回答した生徒には、平均学習時間を問う項目に「ほとんど学習しない」と回答した生徒が突出して多く、家庭学習時間の平均も大幅に短くなっていることが分かった（図5）。

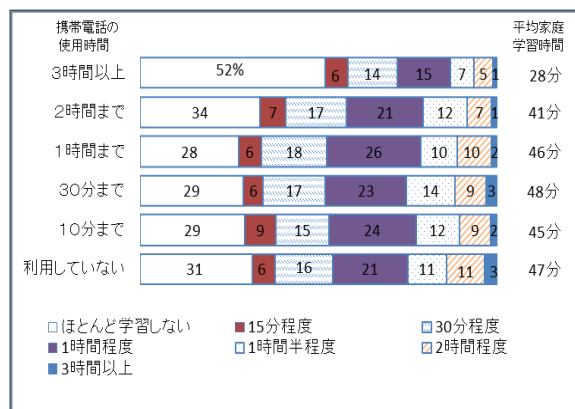


図5 情報端末等の使用時間と家庭学習時間

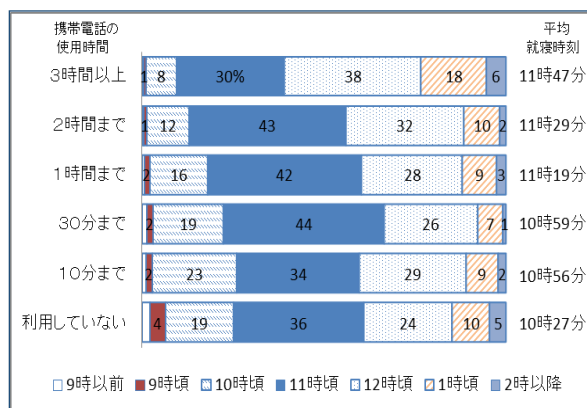


図6 情報端末等の使用時間と就寝時刻

また、携帯電話等の使用時間が長くなるほど、就寝時刻が遅くなる傾向があった(図6)。

問4への回答の割合は、「3時間以上」と回答した生徒が全体の44.4%と最も多く、次いで「2時間まで」と回答した生徒が33.0%となっており、2時間程度以上利用している生徒の割合が、全体の約80%を占めている(図7)。

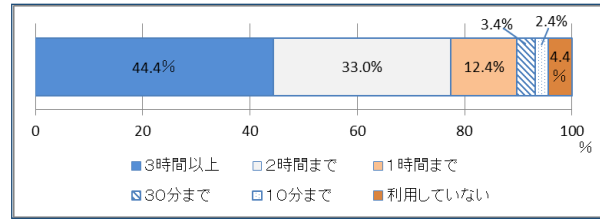


図7 情報端末等の使用時間についての回答の割合

GTZ 平均値は、問4に対して「30分まで」と回答した生徒が最も高く、「30分まで」を境に使用時間が増えるにつれて低くなっており、「3時間以上」と回答した生徒が際立って低い(図7)。また、「10分まで」「利用していない」と回答した生徒の平均値も、「30分まで」と回答した生徒より低い値であった(図8)。

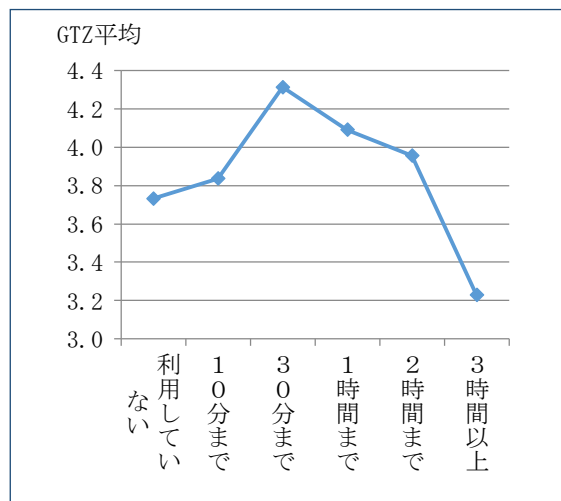


図8 携帯等の情報端末の使用とGTZ平均値

(エ) アンケート項目「授業への期待」について

アンケート問1「あなたは、どのような授業を最も期待していますか」に対する回答の割合は図9のとおりである。これらの回答別に、他のアンケート項目への回答の平均値を求めた。その結果、問1に「特に期待することはない」と回答した生徒の平均値は、問4を除く全ての項目で最も低い値となっており、さらには、GTZも最も低くなっていた(表4)。ちなみに、問4は前述のとおり、携帯電話等の情報端末の使用時間に関する項目であり、使用時間が最も長いという結果になっている。

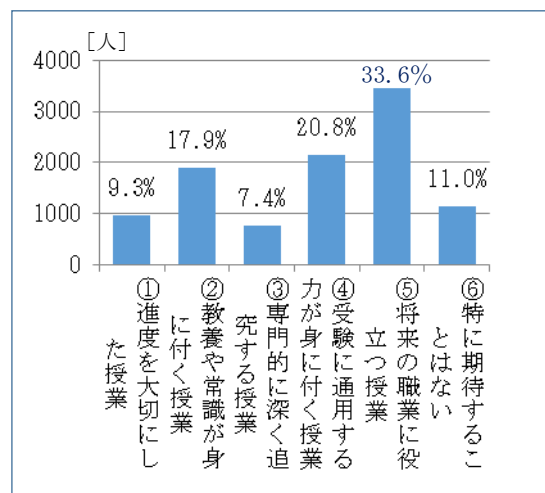


図9 どのような授業を期待するかについての回答数

表4 アンケート項目への回答の平均値とGTZ平均値（問1への回答別）

問1への回答	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16	問17	問18	問19	問20	問21	問22	問23	問24	問25	問26	問27	問28	問29	問30	GTZ
①進度を大切にした授業(965名)	2.2	0.41	123	4.1	3.5	3.5	4.0	4.3	3.3	2.6	4.5	4.3	4.3	3.8	3.7	4.0	3.7	4.2	4.1	4.6	4.1	3.0	3.5	3.5	3.5	3.7	3.9	3.8	2.9	4.0
②教養や常識が身に付く授業(1849名)	2.1	0.40	125	4.0	3.4	3.4	3.9	4.1	3.0	2.4	4.4	4.1	4.1	3.6	3.7	3.8	3.6	4.1	4.0	4.5	4.0	2.9	3.2	3.5	3.4	3.6	3.7	3.5	2.6	4.0
③専門的に深く追及する授業(766名)	2.1	0.48	125	3.9	3.4	3.4	3.8	3.9	3.0	2.7	4.1	4.1	4.1	3.7	3.6	4.1	3.9	4.1	4.0	4.4	3.9	2.8	3.2	3.4	3.4	3.7	3.7	3.5	2.5	3.1
④受験に通用する力が身に付く授業(2147名)	2.1	0.34	125	4.0	3.4	3.5	3.9	4.4	3.2	2.4	4.5	4.2	4.2	3.8	3.7	3.9	3.7	4.2	4.1	4.6	4.1	2.9	3.4	3.5	3.5	3.7	3.8	3.7	2.7	5.1
⑤将来の職業に役立つ授業(3467名)	2.0	0.30	131	3.9	3.2	3.2	3.8	3.8	3.0	2.5	4.4	4.1	4.1	3.7	3.6	4.1	3.8	4.1	4.0	4.5	4.0	2.8	3.2	3.4	3.4	3.5	3.7	3.5	2.6	3.0
⑥特に期待することはない(1136名)	1.7	0.26	136	3.5	2.5	2.9	3.3	3.2	2.7	2.1	3.6	3.8	3.7	3.1	3.0	3.2	2.9	3.5	3.5	4.0	3.2	2.5	2.7	3.1	3.1	2.7	2.9	2.9	2.0	2.5

イ 学力向上図による分析

(ア) 学力向上図の開発

GTZ とつながりの強い要素と、それらどうしの相互の関係を見いだすために、GTZ とアンケート 14 領域間の相関分析を行った（表5）。相関の強い領域どうしを結び付け、GTZ と各領域との関係を表すモデルを試作しては、共分散構造分析を繰り返した。その結果、GFI=0.997、AGFI=0.989、RMSEA=0.039 という妥当性が担保されたモデルを見いだすことができたので、これを学力向上図とした（図10）。

※ 適合度の指標は GFI>0.900、AGFI>0.900、RMSEA<0.050 であり、特に RMSEA の値は 0.100 以上であればよくないとされる（小塩真司 2008）

表5 GTZ とアンケート領域の相関分析結果（一部）

	1	2	3	4	5
1 GTZ	-				
2 授業理解	.322 **	-			
3 家庭学習	.331 **	.448 **	-		
4 学習意欲・学習動機	.251 **	.459 **	.508 **	-	
5 自己管理能力	.186 **	.332 **	.361 **	.422 **	-
6 感謝の心・貢献意欲	.148 **	.234 **	.317 **	.456 **	.393 **

** p<.01

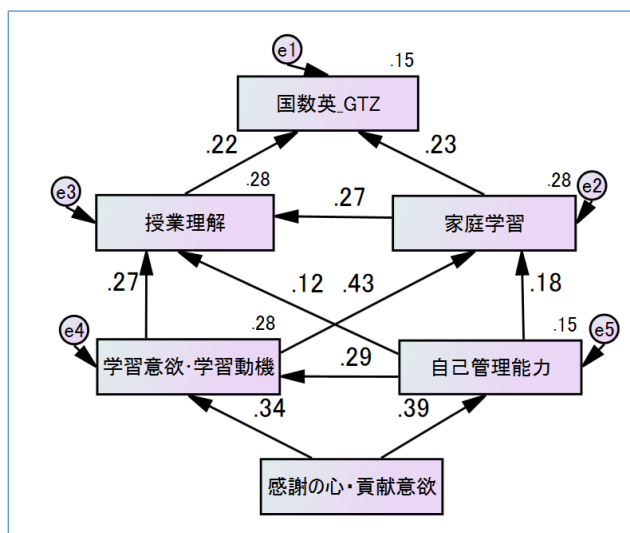


図10 学力向上図（パス解析図）

まず、これについて、二点補足する。

「家庭学習」については、アンケート項目が問9「家庭学習は必要だと思っている」、問10「家庭学習の仕方が理解できている」となっており、家庭でどの程度学習したのかを把握できるようにはなっていない。しかし、これを学習力チェックでの項目「学習時間（授業を除く）」（基礎力診断テスト受験者の7387名）に置き換えて共分散構造分析を行ったところ、GFI=0.994、AGFI=0.975、RMSEA=0.059となり、モデルの適合度は高いままであった。よって、問9や問10の問い方は、学力向上図の妥当性を損なうものではない。

次に、「感謝の心・貢献意欲」の領域を「感謝の心・貢献意欲」を含む大きな領域である「自尊感情」に置き換えて共分散構造分析を行ったところ、GFI=0.993、AGFI=0.971、RMSEA=0.063となり、こちらの場合でも、ある程度適合度の高いモデルとなっている。これと、「感謝の心・貢献意欲」は「自尊感情」に含まれていることを考え併せて、学力向上図に自尊感情を追記した（図11）。

なお、学力向上図は、GTZに直接つながる要素が「授業理解」「家庭学習」であること、また、それらを支えている情意面が、「感謝の心・貢献意欲」に基づいた「学習意欲・学習動機」「自己管理能力」であることを示している。

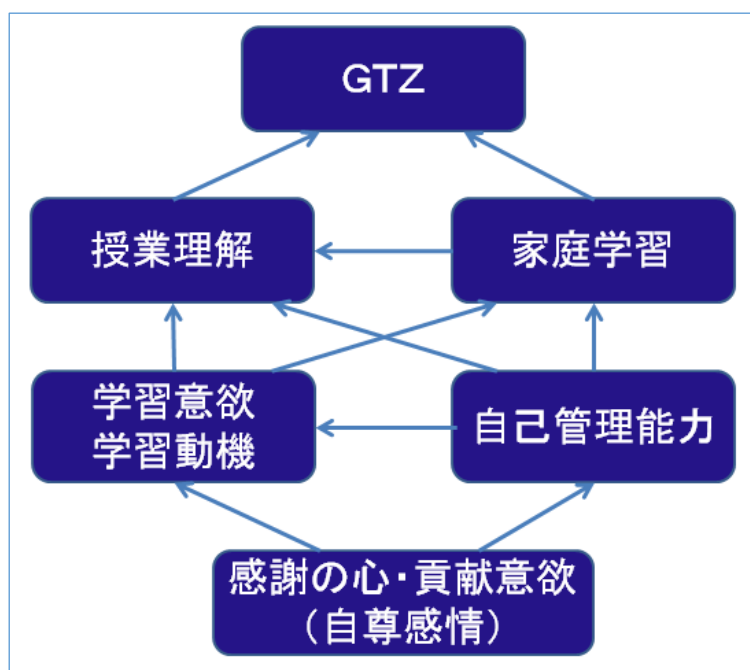


図11 学力向上図

(イ) 母集団による影響の違い

学力向上図を基に多母集団同時分析を行ったところ、次のaからdにおいて、違いが見られた。

a 学年別（1年生、2年生）

1年生（3715名）、2年生（3366名）のグループで多母集団同時分析を行った結果、パス係数に大きな差が見られたのは、「家庭学習」から「GTZ」へのパス係数（1年生0.16、2年生0.32）であった（図12）。つまり、2年生は1年生に比べて、家庭学習の必要性、やり方を理解したときに、GTZにつながりやすくなっている。このことについて、検査が4月までに実施されていることから、1年生は主に中学校でのことについて、2年生は高等学校での

ことについて回答していることを念頭において考察する。

このパス係数の違いは、授業の進む速さと学習の難易度とが関係していそうである。高等学校では、中学校に比べて授業の進度が速いため、家庭学習なしには、学力の向上が難しくなっていると考えられる。また、学習の難易度も上がるため、授業のみでは学習内容が定着しないのではないか。そのために、家庭学習に対する意識の高い生徒ほど、GTZが高くなり、結果として、1年生よりも2年生の方が「家庭学習」から「GTZ」へのパス係数が大きくなっていると考えられる。つまり、高等学校では、中学校よりも家庭学習の重要性が高くなっていると言える。

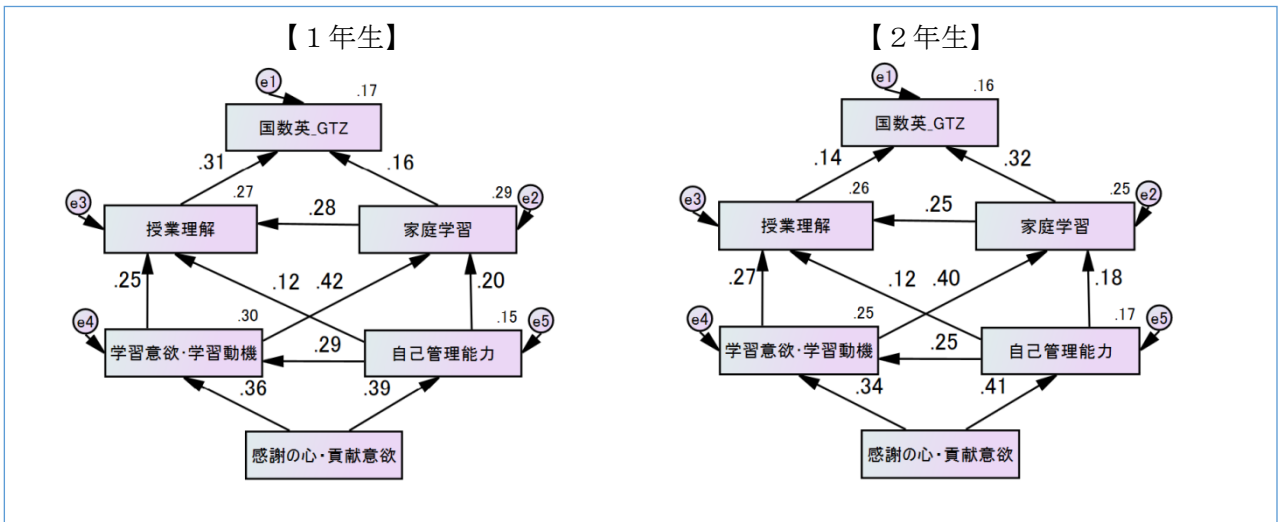


図 12 学年の違いによる共分散構造分析・多母集団同時分析結果

b 性別

男子 (4966 名)、女子 (4521 名) のグループでの多母集団同時分析の結果、パス係数に違いが見られたのは、「家庭学習」から「GTZ」へのパス係数 (男子 0.18、女子 0.28) であった (図 13)。女子は、男子に比べて家庭学習の必要性を感じたとき、また、家庭学習のやり方を理解したときに GTZ の上昇につながりやすいことが分かる。

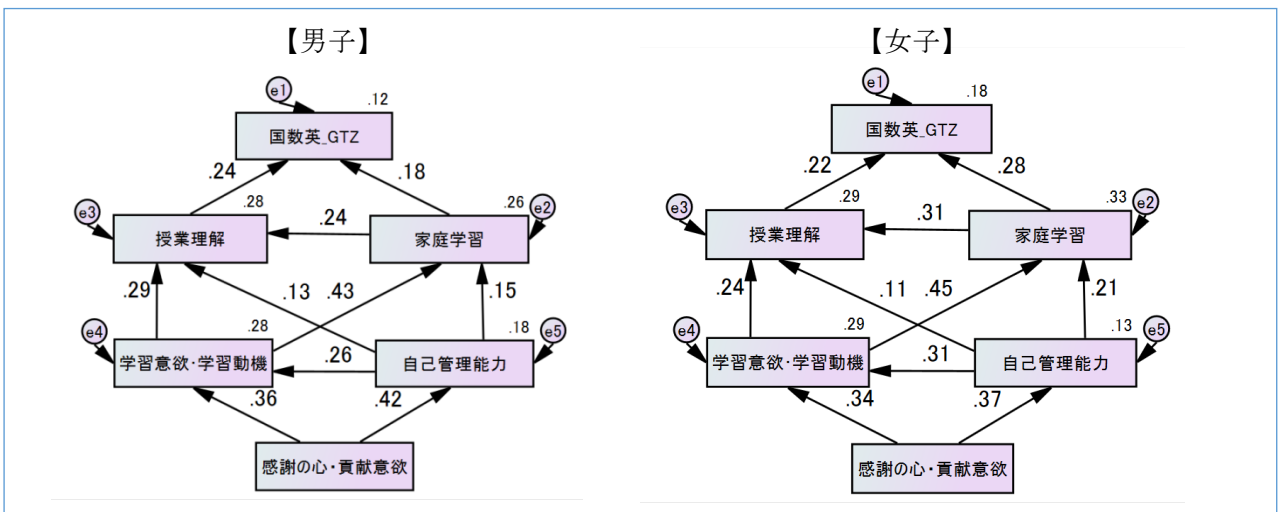


図 13 性の違いによる共分散構造分析・多母集団同時分析結果

c アンケート領域「学校生活の充実」

問5「学校生活は、充実している」の項目に、肯定的（あてはまる、どちらかといえばあてはまる）に回答しているグループ（6932名）と否定的（どちらかといえばあてはまらない、あてはまらない）に回答しているグループ（873名）で多母集団同時分析を行った。その結果、「授業理解」から「GTZ」へのパス係数（肯定的0.23、否定的0.13）に違いが見られた（図14）。学校生活の充実によって、授業理解が、GTZの上昇につながりやすくなることが分かる。

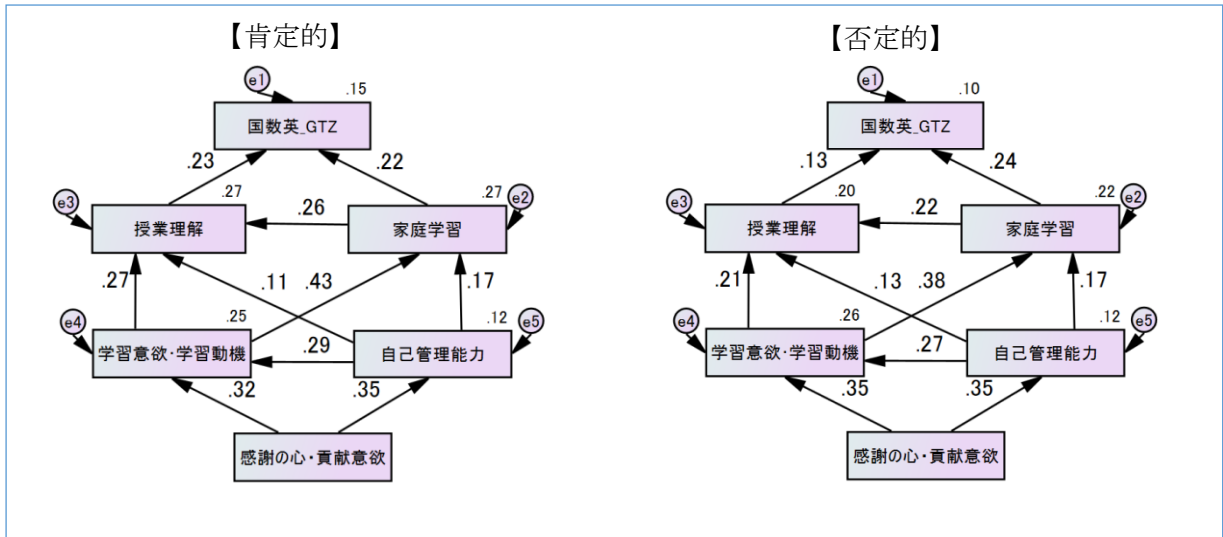


図14 「学校生活は、充実している」への回答の違いによる共分散構造分析・多母集団同時分析結果

d アンケート領域「教員の熱意」

問8「学校の先生は、熱心に教えてくれる」の項目に、肯定的（あてはまる、どちらかといえばあてはまる）に回答しているグループ（6932名）と否定的（どちらかといえばあてはまらない、あてはまらない）に回答しているグループ（873名）とで多母集団同時分析を行った。その結果、「学習意欲・学習動機」から「授業理解」へのパス係数（肯定的0.27、否定的0.09）に違いが見られた（図15）。教員の熱意は、学習意欲のある生徒の授業理解を促進することがわかる。

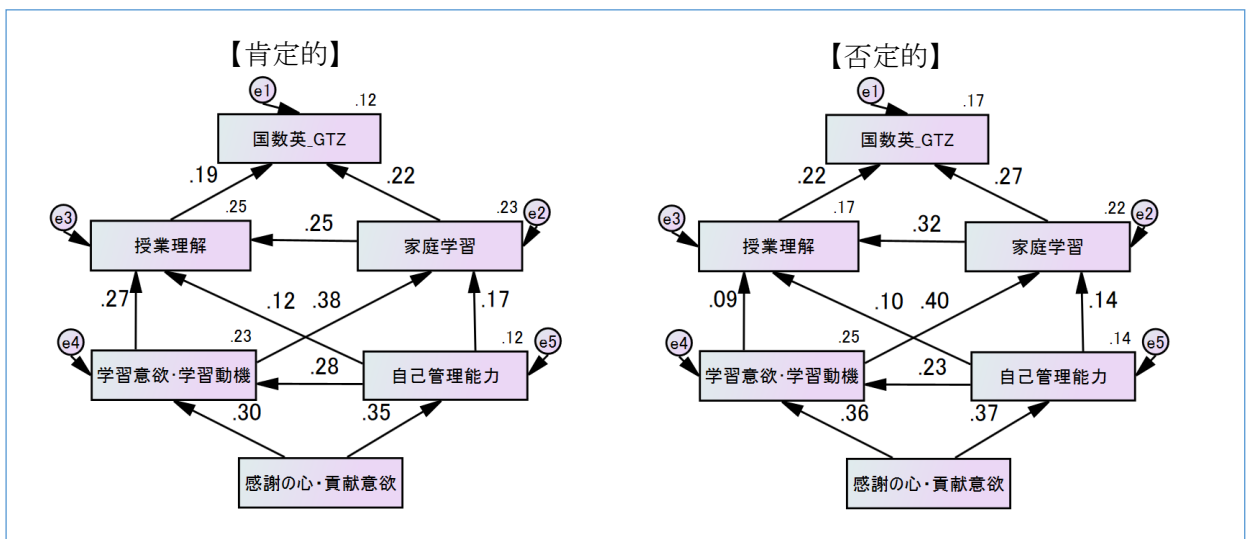


図15 「学校の先生は、熱心に教えてくれる」への回答の違いによる共分散構造分析・多母集団同時分析結果

また、「教員の熱意」は、「学習意欲・学習動機」との相関（相関係数 0.40）も認められることから、「教員の熱意」によって「学習意欲・学習動機」が高められ、さらに「授業理解」につながっていくという構図が見えてくる。

(2) 聞き取り調査結果

平成 25 年度以降、入学後に GTZ の平均値が上昇している高等学校の取組を聞き取り調査した。その結果を学力向上図に関連付けて図 16 にまとめた。

「授業理解」では、授業評価の結果を受けての授業改善やユニバーサルデザインの授業、生徒どうしの教え合いによるアクティブラーニング等が実践され、生徒の授業理解につなげていた。「家庭学習」では、宿題の工夫や放課後の空き教室を利用した自習室の活用、「学習意欲・学習動機」については、生徒が希望している進路について細部まで調べ上げ、緻密な指導・助言によって生徒の不安を払拭し、迷いなく学習に向かわせていた。また、「自己管理能力」を高めるために、マネジメントノートの活用や生活態度の改善のための生活チェックなどを行っている学校もあった。「感謝の心・貢献意欲」を高めるための取組としては、アクティブラーニング型の授業にその要素があると感じた。また、教員の協力体制としては、共通の目標を持って、授業で活用するワークシート等を共有している学校があり、「チームで取り組むことで惰性に流れなくなる」「チームで働くことでいろんなアイデアが生まれる」という感想を聞くことができた。共有、協調が大きな力になっていると感じた。これらの取組に携わっている教員からは、それぞれ並々ならぬ「教員の熱意」が感じられた。

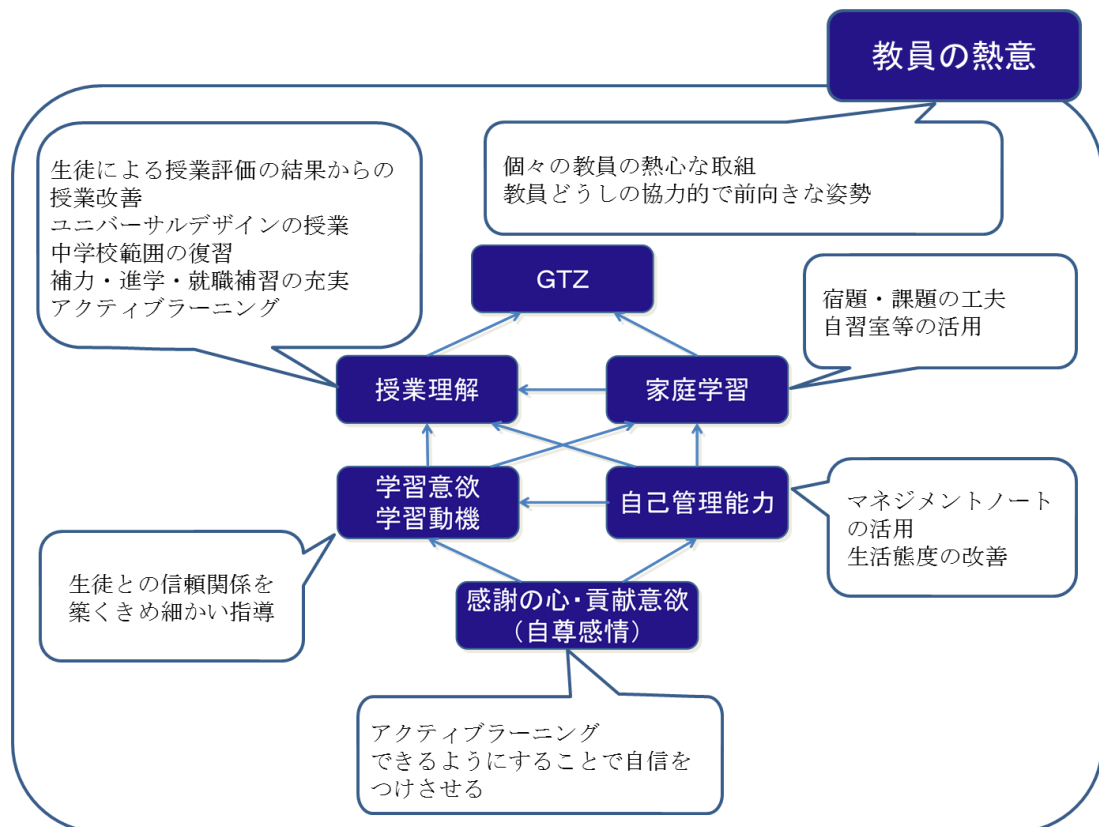


図 16 入学後に GTZ が上昇している各高等学校の取組

5 成果と課題

(1) 成果

1年間の研究を通じて得た知見を以下にまとめた。

アンケート結果は、GTZ が下がるにつれて回答が否定的に変化する傾向があり、最も低い層に特有の特徴といったものは存在しなかった。そのため、GTZ に依存しない学力向上への糸口を探ることにし、その研究から次のようなことが分かった。

GTZ 上昇と最も強いつながりがあるのは「授業理解」「家庭学習」であった。「授業理解」については、授業に期待することはないと生徒に思わせてはならないこと、「家庭学習」については、習慣付けのために重要な時期が1年次であることが分かった。「授業理解」「家庭学習」を支える「学習意欲・学習動機」「自己管理能力」のうち、「自己管理能力」については、携帯電話等の情報端末の過剰な利用が、学習への妨げとなっていることが判明した。

また、学力向上図の開発を通して、これらの要素の土台となるものが「感謝の心・貢献意欲（自尊感情）」であることと、要素間の相互の関係とが明らかになった。

さらに、生徒の「学校生活の充実」や「教員の熱意」によって、各要素が段階的にGTZ 上昇へと結び付けられることが分かった。

学力向上図に示されている要素への手立ては、日頃の教育活動で取り組んでいるものである。日頃の教育活動が、学力向上のための重要な手立てとなっていることを証明できた。そして、教員の熱意が学力向上を促進する要素であったことは、多くの教員の教育活動への意欲を高める大きな成果だと感じている。

(2) 課題

今後、学力向上図の有効な活用方法について検討していく必要がある。

(3) 今後の取組

「感謝の心・貢献意欲」「自己管理能力」を高めるなど、学力向上図を意識して、日頃の教育活動を、より実りあるものにしていきたい。そのために、「感謝の心・貢献意欲」を持つことをしっかりと心掛けたい。「教員の熱意」は生徒の学力向上を推進する。日々の熱心な取組が、生徒の学力向上に一役買っていると肯定的に捉え、意欲的に教育活動を行っていきたい。

【主な参考・引用文献】

NHK 放送文化研究所（2013）：NHK 中学生・高校生の生活と意識調査 2012 失われた 20 年が生んだ“幸せ”な十代，NHK 出版，pp70-71

岸本裕史（1981）：改訂版 見える学力、見えない学力，株式会社大月出版

高知県教育委員会高等学校課（2014）：平成 26 年度学力向上サポート事業第 1 回研究協議会資料

小塩真司（2008）：はじめての共分散構造分析（第 2 版）—Amos によるパス解析，pp115-116

総務省（2012）：平成 24 年度版情報通信白書，p153

早坂清志・間久保恭子（2013）：すぐわかる Excel データ集計&分析，株式会社アスキー・メディアワークス

小林孝嗣&できるシリーズ編集部（2014）：できるポケット+ビッグデータ入門分析から価値を引き出すデータサイエンスの時代へ 株式会社インプレスジャパン，p8

文部科学省国立教育政策研究所（2014）：平成 26 年度全国学力・学習状況調査報告書【質問紙調査】，p64

高知県学力定着把握検査アンケートの質問項目とその分類

	質問項目	領域		作成者	
問1	あなたは、どのような授業を最も期待していますか。 ①進度を大切に授業 ②教養や常識が身につく授業 ③専門的に深く追究する授業 ④受験に通用する力が身につく授業 ⑤将来の職業に役立つ授業 ⑥特に期待することはない			高知県教育委員会高等学校課	
問2	あなたは、新聞（テレビ・ラジオ欄以外）を読みますか。 ① 必ず毎日読む ② ほぼ毎日読む ③ 時々読む ④ ほとんど読まない ⑤ 読まない				
問3	あなたは、学校の図書室や地域の図書館等を週に何日利用しますか。 ① 4日以上 ② 3日 ③ 2日 ④ 1日 ⑤ 利用しない				
問4	あなたは、携帯電話やスマートフォンなどの情報端末を、1日にどの程度利用していますか。 ① 3時間以上 ② 2時間まで ③ 1時間まで ④ 30分まで ⑤ 10分まで ⑥ 利用していない				
問5～問30について、次の①～⑤の中から選択 ① あてはまる ② どちらかといえばあてはまる ③ どちらともいえない ④ どちらかといえばあてはまらない ⑤ あてはまらない					
問5	学校生活は、充実している	(学校生活の充実)		高知県教育委員会高等学校課	
問6	社会の動きに関心をもっている	(社会への関心)			
問7	学校の授業は、よく理解できている	(授業理解)			
問8	学校の先生は、熱心に教えてくれる	(教員の熱意)			
問9	家庭学習は必要だと思っている	(家庭学習)			
問10	家庭学習の仕方が理解できている				
問11	地域の活動（季節の行事や地域のそうじなど）に参加している	人間関係形成・社会形成能力			キャリア形成に関するアンケート（小中学校版）より抜粋 高知県教育センター
問12	人の役に立つ人間になりたいと思う				
問13	場に応じて、ていねいな言葉をつかうことができる	自己理解・自己管理能力 (自己管理能力)			
問14	規則、ルール、約束を守っている				
問15	失敗しても、もう一度、挑戦している	課題対応能力			
問16	失敗をした際には、なぜ失敗をしたのか、ふりかえるようにしている				
問17	将来の夢や目標を持っている	キャリアプランニング能力			
問18	進学や就職をした後、積極的に取り組んでみたいことがある				
問19	当番や係など自分の仕事をしっかりとやっている	基本的な生活習慣 (自己管理能力)			
問20	みんなが集まる場所では、ほかの人のことを考えて行動している				
問21	自分のことを見守ってくれている周りの人々に感謝している	関係の中での自己 (感謝の心・貢献意欲)			
問22	私は人のために力を尽くしたい				
問23	私は自分のことが好きである	自己評価・自己受容			
問24	私は自分という存在を大切に思える				
問25	人と違っていても自分が正しいと思うことは主張できる	自己主張・自己決定			
問26	私は自分の判断や行動を信じていることができる				
問27	新しい知識を身に付けたいから勉強をしている	学習に対する内発的動機 (学習意欲・学習動機)			
問28	授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う				
問29	問題を解くときは最後まであきらめずに考えている				
問30	親や先生に認めてもらいたいから勉強をしている	学習に対する外発的動機			

※ 領域の欄については（ ）内は独自に定めた領域名、（ ）なしは、キャリア形成に関するアンケート（小中学校版）より抜粋した領域名